

平成 25 年 10 月 26 日

初段受験

空手道で一番苦しかったこと

西東京本部 浜田山支部 藤井 潤

仕事や学業がありながら、趣味やスポーツを極めようとする、誰もがその両立に悩むことになる。御多分に漏れず、私もそうであった。マスコミの仕事といえばその悪評通り、深夜から、時には早朝に及ぶばかりか、休日さえもままならない。約束していた会合のドタキャンはしばしばで、いわば予定が立てられない。友人どころか家族にも不義理ばかりであった。

そんな状況の中で空手道を始め、極めようというのである。果たして両立できるのか。始めることが最も大きな決断であり、続けることが最も高いハードルであった。一番苦しかったことは、誰もが普通に取り組んでいることであった。大学時代はラグビーをしていたが、格闘技は大好きで、よく観戦していた。というのも、生まれ故郷である愛媛は極真系の芦原氏が道場を開設、空手が身近で、近所には稽古をしていた友人が何人かいた。しかし、幼少時に運動音痴だった私は空手のみならずスポーツには全く無縁だった。今思えば、それが後にラグビー部に入るなど、両親はおろか自分でも夢にも思わなかっただろう。とはいえ空手には心のどこかで憧憬の念を抱きながら育ってきたのであった。

もう一つ。大学時代、国際政治学を学ぶ機会を得て、数多くの国籍の違う学生と机を並べて学んだ。彼らは何か使命感のようなものを持って学業に取り組んでいた。まさに国を代表するかのような姿勢であり、よく自国を引き合いにして文化を比較、知識を吸収していた。しかし彼らはほとんどが日本の文化は素晴らしいという。「なぜ日本人はもっと日本らしさを出さないのか」-私はよくこうした言葉を聞いた。日本的なものを身に付ける必要性、そんな感覚を何と無く肌で感じた学生時代だった。余談だが、バイオリニストの五島龍くんは人生のほとんどを海外で過ごしているが、自己のアイデンティティを祖父が師範だった空手に求めたという。すなわち日本人らしさのようなものを芯に秘める必要性を空手に見出したのだろう。彼はバイオリニストでありながら今だに空手を続け、ハーバード大では空手にヒントを得て物理学を専攻したという。

そして月日が流れ、子供が生まれた。子供の習い事について妻と話し合った時、自然に「空手を習おうよ」という言葉が出てきた。今までの内なる思いがそう言わせたのだろう。そして親子空手であるということは、自分にも新たなチャレンジをする機会を、幼少より抱き続けてきた思いをついに実現する機会を得ることになったのだ。

空手を始め、続けるということは最も高いハードルである「仕事」のやり方を変える機会となった。これが一番苦しいことだった。土日を休むべく調整をし、続けるべくなるべく深夜に及ぶような仕事、付き合いを辞める、これはかなり苦しかった。さらにどうしても早朝に帰宅となっても空手は待ってくれない。ほとんど寝ないまま練習に向かう。自責の

念にかられながら拳を突き出すという苦しさもあった。

しかしこれらの苦しみは確実に自信となり、自分の価値観を変えて行った。「空手に先手無し」という言葉も知った。空手の型は必ず防御からスタートする。自己を強くすれば先手、すなわち自分から暴力を仕掛けるようなことは無いというのだ。いじめなど学校の問題に突き当たった時、子供たちとこの言葉を通して、話し合うことができた。そんな会話ができるのも空手のおかげだった。こうして子供たちには、私自分が今の今まで身につけてこられなかった日本人らしさを、日本のアイデンティティを芯に秘めて人生を歩んで行ってもらいたいと思う。

そして未だきちんと会社の仕事の調整がうまくつけられないでいる私は、道を極めるべく、自己のアイデンティティにもう少し自信を深めるべく、もうしばらく苦しんでいきたいと思う。